

国立研究開発法人 日本原子力研究開発機構 敦賀廃止措置実証部門
新型転換炉原型炉ふげん 廃止措置部 計画管理課 編集

第36号掲載内容

- I. ICAPP2017参加報告
- II. TAG62・63会議報告
- III. ハルデン拡大会議報告
- IV. 原子力学会秋の大会報告
- V. 第35回「ふげん廃止措置技術専門委員会」報告
- VI. 中部電力(株)との廃止措置連絡会開催報告
- VII. 平成29年度 解体撤去工事及び汚染の除去工事の実施状況
- VIII. 廃止措置計画の変更認可申請について

今回、初めての国際会議の参加で戸惑うことが多くありましたが、参加の登録から論文・プレゼンテーション資料作成及びプレゼンテーションの実施まで多くの刺激を受け、また、国際会議の雰囲気面に直に触れたことは、大変貴重な経験となりました。

II. TAG62・63 会議報告

(安全・品質保証部 北村 高一)

OECD/NEA 原子力施設廃止措置プロジェクトに関する技術情報交換のため、協力計画プログラム(CPD)の下、設置されている技術諮問グループ会合(以下:TAG)に毎年度技術者を派遣し情報交換を行っています。平成29年度は、デンマーク・コペンハーゲンにて5月に開催されたTAG62会議(デンマークのDanish Decommissioning社とスウェーデンのBarsebäck Kraft AB社との共同幹事)に1名、フランス・シェルブール等で10月に開催されたTAG63会議(フランスAREVA(現在Oranoに改称)/EDF/CEAの幹事)に2名参加しました。

会議はそれぞれ5日間にわたって行われ、核燃料施設及び原子炉施設から20プロジェクト以上の廃止措置状況報告があり、「ふげん」からも、復水器等の解体、原子炉の系統隔離、原子炉構造材からの試料採取の進捗と今後の計画、レーザによる原子炉解体技術開発等の廃止措置状況について発表し、情報交換を行いました。

毎回特定のテーマで議論するトピカルセッションでは、TAG62会議において、「サイト環境修復」のテーマで、TAG63会議において、「材料管理」のテーマで報告・議論がなさ

I. ICAPP2017 参加報告

(安全・品質保証部 安全管理課 橋本 貴司)

平成29年4月27日に、京都で開催されたICAPP2017(2017 The International Congress on Advances in Nuclear Power Plants)に参加し、テクニカルセッションでプレゼンテーションを行いました。

ICAPP2017は、日本、米国、韓国及び仏国の原子力学会が主催する年次の国際会議であり、平成29年4月24日から28日の間、福井と京都を会場に、原子力の進歩に関する本会議、パネルセッション、テクニカルセッション等が行われ、多くの関係者が会しました。

プレゼンテーションは、テクニカルセッションの10ある技術トラックのうち、トラック8「燃料サイクル、廃棄物管理、廃炉のセッション」において、「重水の不純物除去技術」をテーマとして、重水搬出に伴い「ふげん」で実施したオキシソルフィン活性炭充填カートリッジフィルタ及びメンブレンフィルタを用いたγ核種除去について行いました。プレゼンテーション会場は、トラック毎に分かれた定員60名程度の部屋であり、聴講者は40名弱でした。

れました。CPD 内のタスクグループ報告として、“Dismantling of high contaminated tanks” を新規に立ち上げ活動していくことが紹介されました。

また、テクニカルツアーとして、TAG-62 会議では Danish Decommissioning 社が廃止措置を行っている Risø 研究所と Barsebäck Kraft AB が廃止措置を行っている Barsebäck 原子力発電所を、TAG-63 会議では、La Hague 再処理施設(AREVA)及び Fontenay aux Roses サイト(CEA)のホットセル等の解体状況について現場視察調査を行いました。

平成 29 年度に取得したプロジェクト報告情報及び現場視察調査の概要を以下に示します。

※CPD 規約には、会議情報の機密規定が定められていますので、詳細は控えさせていただきます。

【プロジェクト報告】

(1) 核燃料施設

デンマークのホットセル内の除染方法やイタリアのレガシー廃棄物の回収・リコンディショニング、フランスの再処理プラントの解体状況、英国燃料施設のハザード低減処理、カナダやロシアの研究所の廃止措置状況等の報告がありました。

(2) 原子炉施設

スロバキアのロシア型加圧水型原子炉の化学除染作業、「ふげん」と同様の 2 重管構造の炉心を持つフランスの重水減速炭酸ガス冷却炉の炉心解体シナリオの検討状況、スペインの加圧水型原子炉の廃止措置進捗状況、台湾の多目的研究炉の使用済燃料貯蔵プール内のクリーンアップ作業や沸騰水型原子炉の廃止措置準備状況等、様々な原子炉の廃止措置関連の報告がありました。

【現場視察調査状況】

(1) Risø 研究所

Risø 研究所内には、6つの原子力関係施設があり、Danish Decommissioning 社がその廃止措置や運用に携わっています。3つの研究炉のうち、DR1 及び DR2 が既に解体済み、DR3 が現在解体中であり、今回、炉心の解体現場を視察しました。

(2) Barsebäck 原子力発電所

Barsebäck 原子力発電所は、沸騰水型軽水炉（2 基）の 615MWe 出力で、2005 年運転恒久停止となり、現在、廃止措置の準備中で、運転廃棄物の処理・除去の他、原子炉容器内構造物の取り出し・容器封入、施設内中間貯蔵施設へ貯蔵するプロジェクトを実施中です。今回、原子炉建屋内上部へ立ち入り、内部構造物の取り出し作業や、取り出した廃棄物の遠隔での仕分け分別装置、タービン復水器（未解体）の保管状態等を現場視察しました。

(3) La Hague(AREVA)

La Hague サイト内の再処理施設 UP2 400 の廃止措置状況（大型機器の搬出方法等）、グラフィットの処理施設を視察しました。

(4) Fontenay aux Roses (CEA)

パリ郊外の CEA の研究サイトであり、フランス初の研究炉、研究用のホットセル施設等があります。今回、ホットセルの解体状況、廃棄物の搬出等について視察しました。

毎年度 TAG 会議に技術者を派遣し、最新の諸外国の廃止措置情報が得られる他、「ふげん」の廃止措置作業についても意見交換ができ、「ふげん」の廃止措置プロジェクトを安全かつ合理的に実施していく上で大変貴重な機会となっております。今後も引き続き会議に参加し、最新情報の取得、情報交換に努めていきたいと思えます。



TAG62 会議の様子

Ⅲ. ハルデン拡大会議報告

(廃止措置部 技術実証課 手塚 将志)

平成29年9月25日から28日にかけて、ノルウェーのリレハンメルで開催された The 40th Enlarged Halden Programme Group Meeting (第40回ハルデン拡大会議) に出席しました。

本会議は、OECD/NEA (経済協力開発機構/原子力機関) が、多国籍間の国際プロジェクトとして設立した OECD Halden Reactor Project (ハルデンプロジェクト) において、3年毎に行われるプロジェクト計画更新の間に2回の頻度で開催されるものです。また、ハルデンプロジェクトについては、1958年に設立され、現在は、燃料及び材料に関する研究(F&M)と人・技術・組織に関する研究(MTO)を2本柱としてノルウェーの Institute for Energy Technology (IFE: エネルギー技術研究所) がホストとなり運営している国際プロジェクトです。

会議は、F&M分野とMTO分野で2会場に分かれて並行して各国・各組織から報告が行われ、「ふげん」はMTO分野に出席しました。

MTO分野では、18か国から、①制御室とヒューマンマシンインターフェイスの設計・評価、②運転と保守、③廃止措置、④デジタル計測制御、⑤人間機能・信頼性・アクシデントマ

ネジメント、の5つのセッションごとに現在の取組み状況や課題等に関して報告がありました。「ふげん」からは、廃止措置セッションにおいて、仮想現実感(VR)技術を活用した解体作業シミュレーションシステム(VRdose)の知識マネジメントへの応用の取組み状況について報告し、質疑応答では、今後の開発計画や関連する拡張現実感(AR)の開発状況に関心が寄せられました。(発表の様子は写真1参照)

廃止措置以外のセッションでは、ハルデンプロジェクトとの協力体制に基づく研究成果として、IFEのマン・マシン研究施設(HAMMLAB)を用いたタッチパネル式ディスプレイ操作式制御室によるヒューマンエラー低減効果の検証、プロセス情報に基づく異常診断システムの開発等の研究成果が紹介されました。また、従来の研究成果をもとに各組織が開発を進展させているものとして、プラント運転実績データに基づく炉心監視システムの高度化計画や、人的要因分析プログラムの開発等に係る状況報告もあり、MTO分野の進捗状況について情報共有及び意見交換が行われました。

また、会議とは別に、ハルデンプロジェクトのプロジェクトマネージャーと話をさせて頂く機会があり、当該プロジェクトが60年以上継続出来ている秘訣を伺いました。

マネージャー曰く、一言では「コミュニケーション」。運営会議や計画会議等の頻繁な交流機会の確保や3年単位での計画更新体制等の仕組みを設け、コミュニケーションの継続・発展を重要視しているとのことをお話を伺うことが出来ました。

「ふげん」では、今後も継続して廃止措置を安全かつ合理的に進めていくために、知識継承及び人材育成の観点からも知識マネジメントを推進させるとともに、地元自治体や協力会社等とのコミュニケーションを継続していきたいと考えます。



ふげん「廃止措置におけるVR技術の知識マネジメントへの応用」発表の様子

IV. 原子力学会秋の大会報告

(廃止措置部 施設管理課 土田 大輔)

平成29年9月13日から15日にかけて、北海道大学において日本原子力学会2017年秋の大会が開催され、開発実証課が富士古河E&C株式会社と共同研究を実施している「小口径配管廃棄物の内面除染方法の開発(その2)」を含む7件について、「ふげん」から口頭発表(シリーズ発表、共同発表含む)を行いました。

「ふげん」で発生する解体撤去物等のうち、汚染レベルの低い解体撤去物等に対しては、クリアランス制度を適用し、サイト外へ搬出及び再利用する計画としていますが、配管形状の対象物については内面の除染及び放射能濃度測定のため、配管を半割りにより内面を開放する必要があり、特に小口径配管(配管口径:4B未満)については、作業効率性の観点からこれを実施しておらず、現在はクリアランス対象物から除外しています。本共同研究では、この課題に対して小口径配管を輪切り切断し、乾式除染装置(高速回転するインペラーの遠心力を利用して投射材を小口径配管に投射する「投射法」と小口径配管を装置(バレル)内で攪拌する「バレル法」を組み合わせた除染方法)を用いることで配管内面が除染可能か研究を進めてきて

おり、平成27年度には「ふげん」の実廃棄物を用いてホット試験を実施し、配管内面が除染できる見通しを得ることができました。今回の発表では、除染時間の短縮を図り、処理量を確保することを目的として投射材の形状等を変更した試験の成果について発表しました。

聴講者からは、除染対象物の厚さにより、除染効果に影響があるのでは等の質問があり、これまでの試験で様々な対象物の除染を行っており、いずれも内面の除染は可能であったことから、厚みの違いによる除染効果への影響はほとんど無いと考えていると回答しました。

今後は頂いた意見を参考にしつつ、共同研究を継続し、本研究が「ふげん」及び軽水炉の廃止措置に適用できるよう、技術を確立させていきたいと考えています。



原子力学会での発表の様子

V. 第35回「ふげん廃止措置技術専門委員会」報告

(廃止措置部 施設管理課 毛利 直人)

「ふげん」では、廃止措置を安全かつ合理的に進めていくうえで必要となる技術開発についての計画や成果等にご意見等を頂くことを目的に、機構内外の有識者から構成される「ふげん廃止措置技術専門委員会」(主査:東京大学名誉教授 石樽頭吉)を設置しており、第35回委員会を平成29年11月9日に東京で開催し、次の3件について審議して頂きました。

(1)廃止措置の状況

平成29年度解体撤去工事、汚染の除去
工事作業計画及び実績、原子炉本体解体技
術開発の状況、ふくいスマートデコミッ
ション技術実証拠点の整備等

(2) 小口径配管廃棄物の内面除染方法の開発
開発の経緯、除染実証試験の概要、平成
27年、28年度の試験結果

(3) 原子炉隔離作業実績

原子炉隔離作業の概要、高線量率エリアでの
隔離作業の実績と問題点

委員会では、委員から専門的な視点からのご
助言や質問がなされ、今後廃止措置を進める上
で有意義な知見を得ることができました。

また、石樽主査より以下のご講評を頂きました。

- ふげんの廃止措置の進捗については、使用済燃料の搬出という困難な状況があるなかで、少しずつではあるが進展していると確認することができた。
- トリチウム除去がほぼ終わりに近づいているとの報告を受けた。トリチウムの取扱いは、なかなか難しく一筋縄ではいかないもので苦労もあったと思う。この経験を、ぜひLessons-learnedという形で残して欲しい。
- 復水器の解体が今年度で終了する。類似の形状の2系統のものを異なった手法で解体しているので是非、詳細に比較・分析を行って新しい知見の発見につなげて欲しい。
- 技術開発においては、外部資金の導入を含めて一部地元の大学や企業との連携が図られ共同研究開発が進められており、良いことである。
- 今後廃止措置が進展するに伴って、クリアランスや廃棄物の問題が出てくる。地元の理解と協力が一層求められることになるので、地元の方々に廃止措置の状況等を説明して情報発信する場を作っていくとよい。
- 小口径配管の内面除染技術については、径の小さい配管の内面が乾式ブラストによって可能であるということは意外性があり面白

い。実用化という観点では、まだ取得すべきデータがあり今後、その結果に基づいて現実的な評価を行うことが重要。

- 原子炉隔離作業については、(廃止措置がいよいよ本丸に近づいていると感じた。)炉心廻りの高線量域での作業は、作業者の被ばくとの関連で大きな課題であり、今回の作業経験を評価して将来の被ばく低減につなげて欲しい。

「ふげん」は、今後も委員会で頂いたご意見を反映しながら、安全かつ合理的に廃止措置を進めていきます。



第35回「ふげん廃止措置技術専門委員会」の様子

Ⅵ. 中部電力(株)との廃止措置連絡会開催報告 (廃止措置部 計画管理課 磯見 和彦)

「ふげん」と中部電力(株)浜岡原子力発電所は、廃止措置に係る技術情報の交換を目的に平成22年4月に締結した「原子炉施設の廃止措置に係る技術協力協定書」に基づき、「廃止措置連絡会」を定期的の実施しています。

平成29年度は、5月26日に第14回廃止措置連絡会を「ふげん」において、また、12月6日に第15回を中電浜岡発電所において開催しました。

連絡会では、双方の廃止措置の進捗状況を報告するとともに、法令や地元との安全協定に基づく通報対象事項や発生した不適合情報等の保安活動状況についても情報交換を行いました。

た。

「ふげん」からは、タービン系設備の解体撤去工事や重水・ヘリウム系統の汚染除去工事の状況、レーザー切断技術や原子炉本体からの試料採取に向けた準備状況等を、また、中電からは、タービン発電機の解体撤去状況や排気筒解体撤去に向けた準備状況等について情報提供が行われ、解体撤去物の保管管理方法やクリアランスに向けた取り組み状況等について有意義な意見交換を行うことが出来ました。

また、現場視察では、「ふげん」の原子炉本体解体撤去工事に備えた原子炉本体の隔離状況やA復水器及びA・B湿分分離器等の解体撤去工事現場を確認いただき、中電においては、1号機の原子炉格納容器からの試料採取箇所や1.2号機のタービン建屋発電機補機室設備の解体撤去工事現場等を視察しました。

両プラントの解体撤去工事が本格化し、本連絡会の位置づけは益々重要となってきたことから、今後も引き続き本連絡会を開催して技術情報や経験等の交換・共有を図り、これらを有効に活用することで、更なる安全確保と円滑で着実な廃止措置に努めてまいります。



第14回 廃止措置連絡会/ふげん

Ⅶ. 平成29年度解体撤去工事及び汚染の除去工事の実施状況

(廃止措置部 技術実証課 石山 正弘)

原子炉廃止措置研究開発センター（以下、「ふげん」という。）では、廃止措置計画に基づき、平成20年度より原子炉冷却系統施設の機器・配管等を対象に解体撤去工事を実施しています。また、放射線作業従事者の被ばく低減を図る観点から、重水系・ヘリウム系等の機器・配管等を対象に汚染の除去工事を実施しています。

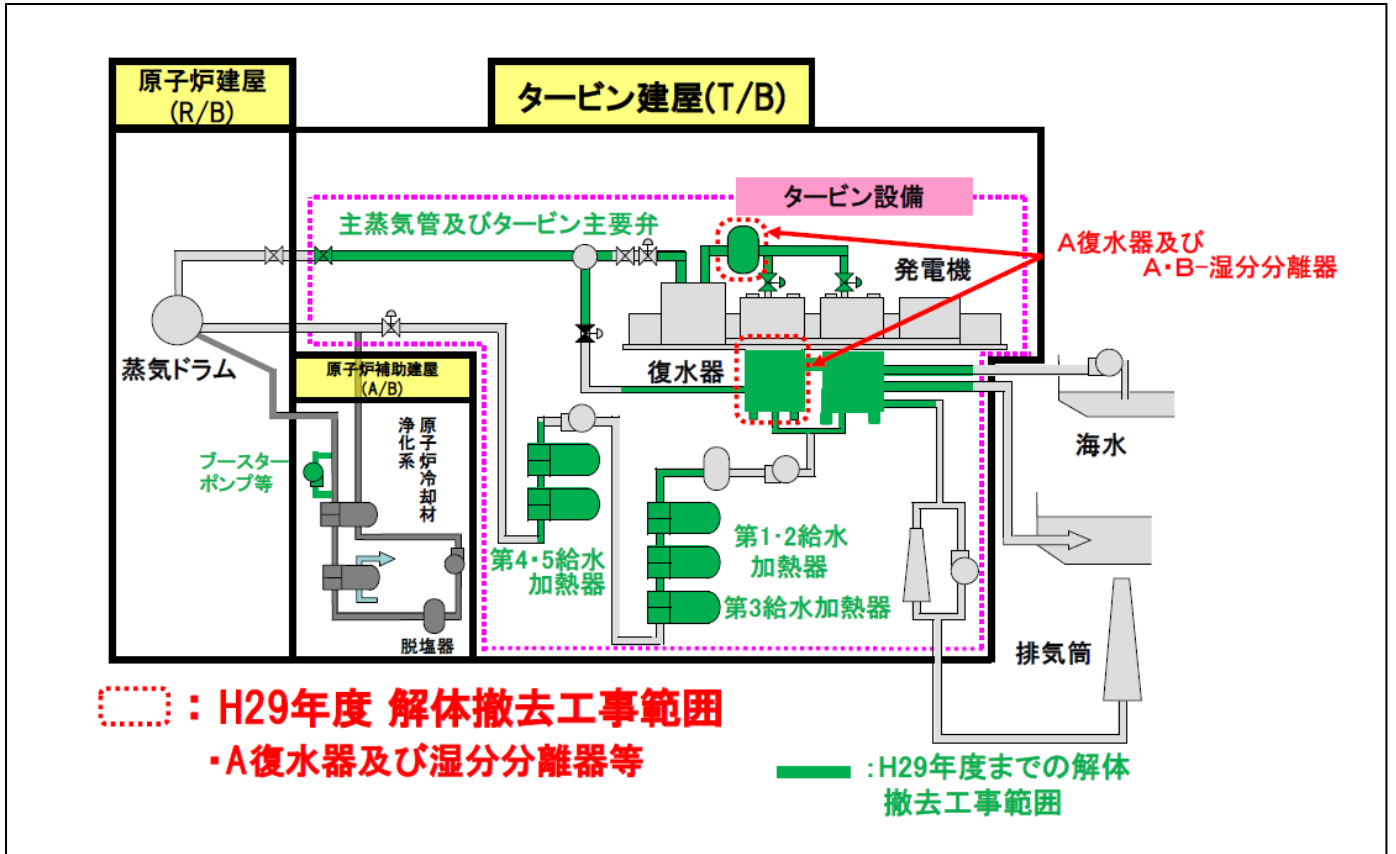
平成29年度はA復水器等解体撤去工事、重水系・ヘリウム系等のトリチウム除去工事等を実施しました。

各工事の平成29年度実績及び平成30年度3月末現在の状況を以下に紹介します。

1. 解体撤去工事

原子炉冷却系統施設の解体撤去工事として、A復水器及び湿分分離器の解体撤去工事を平成29年4月3日から平成30年3月23日にかけて実施しました。

本作業の対象は、タービン建屋に設置されている原子炉冷却系等施設のうち、A復水器と湿分分離器（2基）とその周辺機器・配管です。（下図参照）



(B 復水器上部解体前)



(B 復水器解体撤去後)



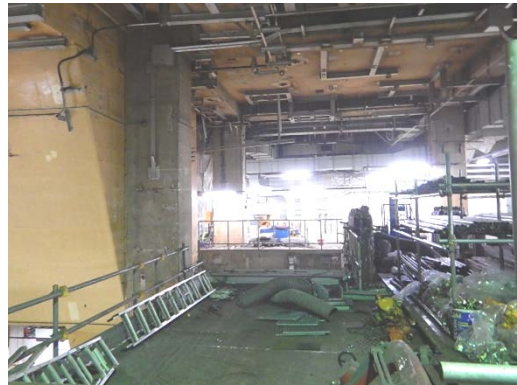
(B 復水器下部解体撤去前)



(B 復水器下部解体撤去後)



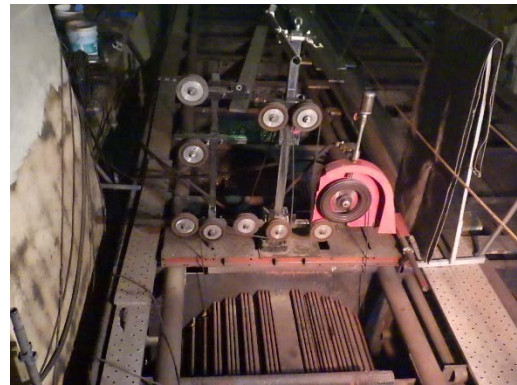
(湿分分離器解体撤去前)



(湿分分離器解体撤去後)



(復水器内部切断作業状況)



(バンドソーによる細管切断状況)

2. 汚染の除去工事

重水系・ヘリウム系等の汚染の除去工事は、原子炉建屋と原子炉補助建屋に区分し、さらに原子炉建屋側を2分割、原子炉補助建屋側では部屋ごとに分割した状態で重水系・ヘリウム系の系統内のトリチウム除去工事を実施しました。

今年度の作業内容は以下のとおりです。

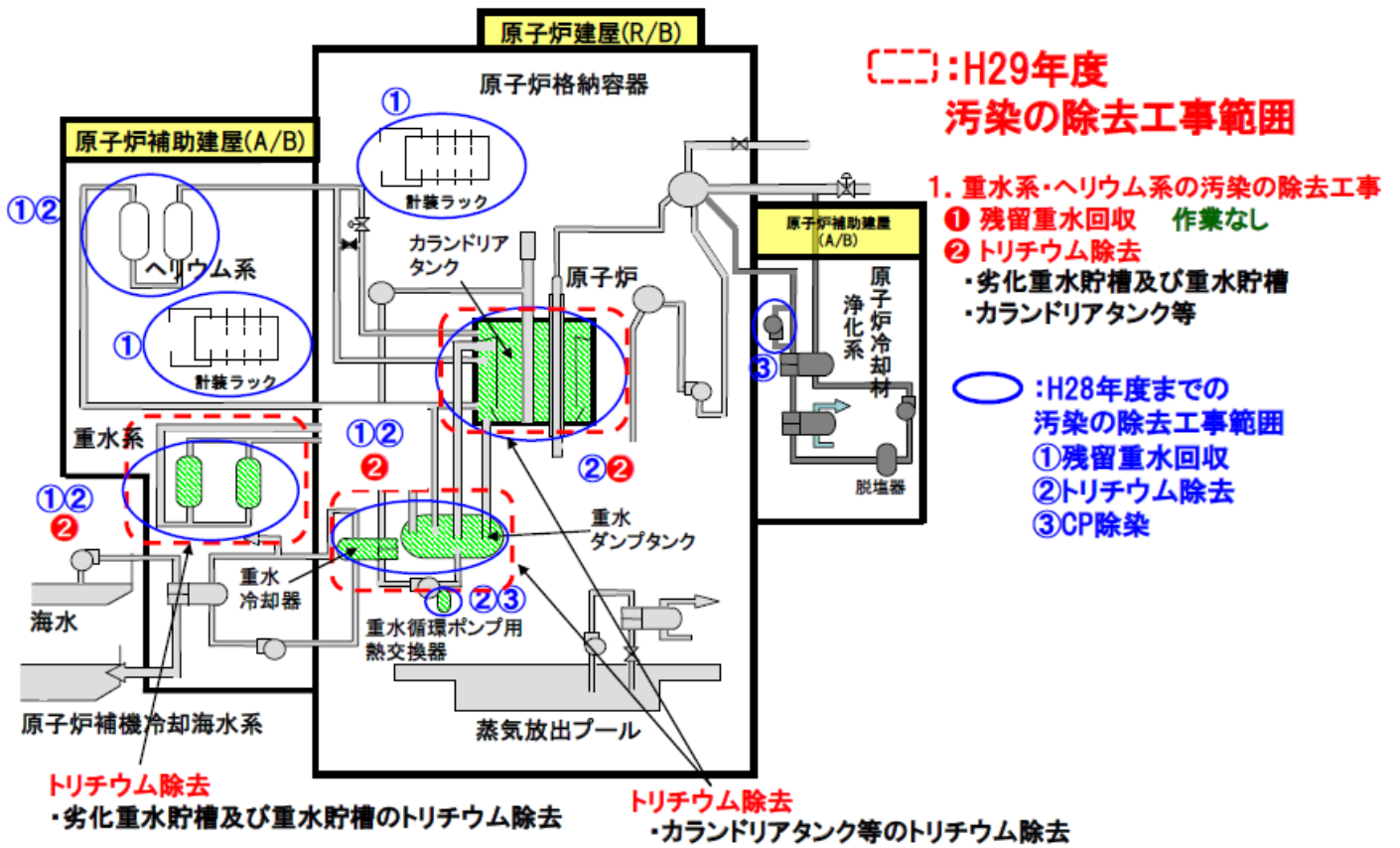
(1) 原子炉補助建屋内機器のトリチウム除去工事

原子炉補助建屋の重水貯槽室（地下1階）、劣化重水貯槽室（地下2階）及び樹脂交換タンク室等（地上3階）に配置されている重水系・ヘリウム系の周辺機器・配管について、真空ポンプを用いた真空引き（真空乾燥）、空気置換によりトリチウム除去工事を実施しました。また、軽水貯槽内のトリチウム水を回収する作業を実施しました。

(2) 原子炉建屋内機器のトリチウム除去工事

原子炉建屋内に設置されているカランドリアタンクを含む重水系・ヘリウム系等の機器については、カランドリアとカランドリアタンク以外の重水系・ヘリウム系配管を分割し、トリチウム除去工事を実施しました。

原子炉建屋と原子炉補助建屋の重水系・ヘリウム系の機器配管について、トリチウム除去完了要件である、トリチウムによる内部被ばく低減のための防護装備等が軽減できるトリチウム濃度であることを確認しました。



(軽水貯槽)



(トリチウム水回収治具設置)



(重水貯槽)



(劣化重水貯槽)



(二次廃棄物の収納作業)



(トリチウム水回収治具片付け)

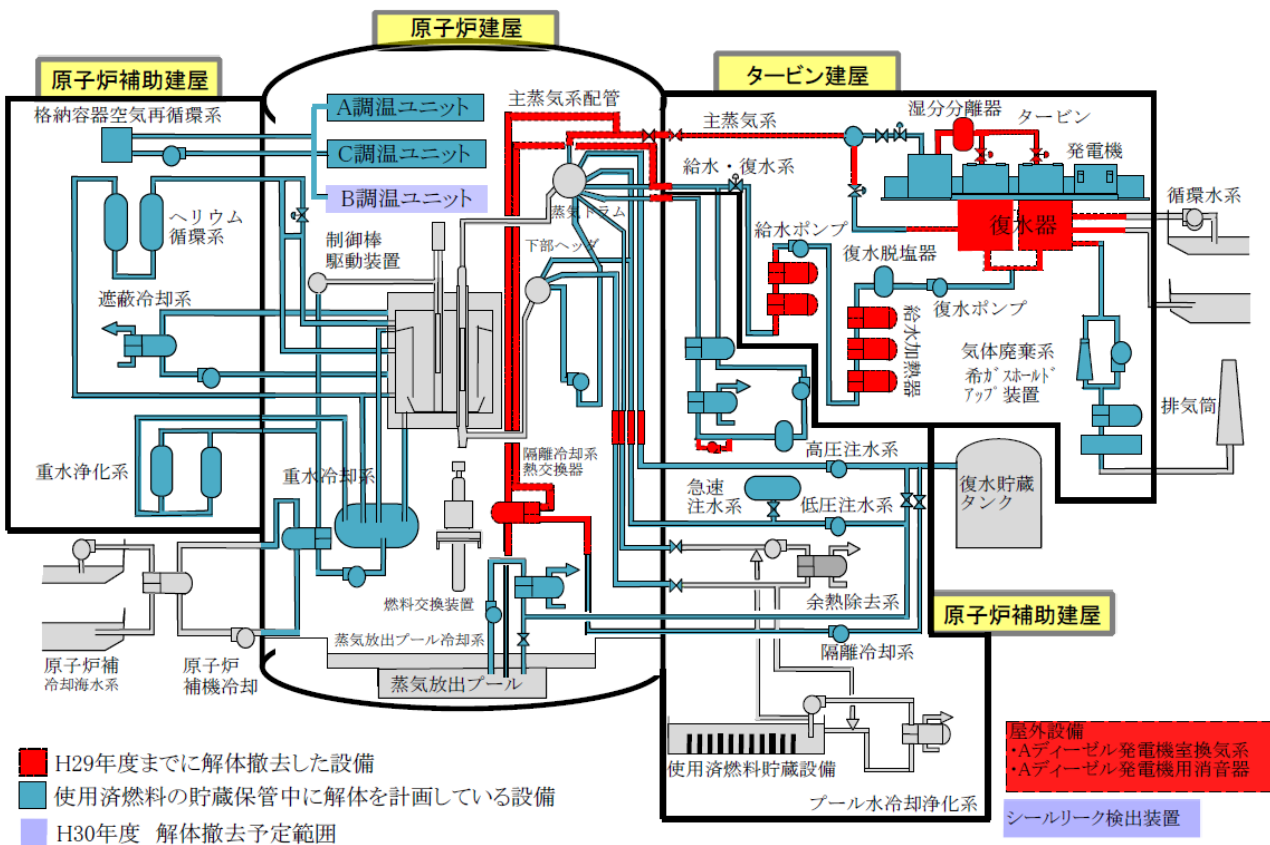


(樹脂交換タンク)

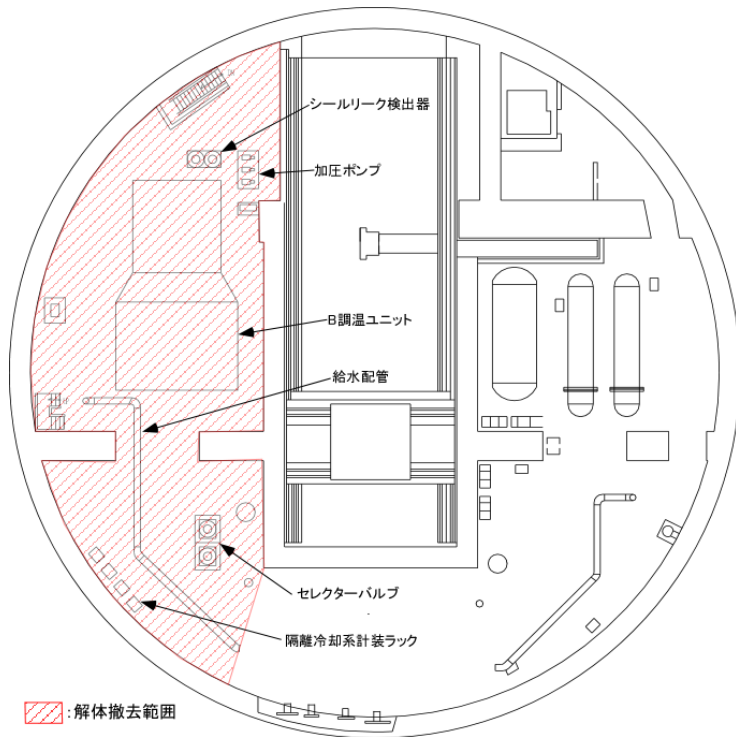
3. 平成 30 年度の解体工事等の作業計画

平成 30 年度は原子炉建屋からタービン建屋への解体物搬出ルートを確認するために、原子炉建屋地下1階のA ループ側の解体を行う予定です。解体対象は空気再循環

環系のB 調温ユニット、シールリーク検出装置等の解体撤去工事を実施します。



(ふげん解体状況概略図)



平成30年度解体範囲（予定）



（シールリーク検出装置）



（B調温ユニット）

Ⅷ. 廃止措置計画の変更認可申請について （所付 打它 正人）

「ふげん」は約25年間の運転を終了し、平成20年2月に廃止措置計画の認可を受けて平成45年度終了の予定で現在廃止措置作業を進めております

「ふげん」には現在、使用済燃料を466体保管しておりますが、平成26年9月から海外処理を視野に技術的確認・検討を行ってきました。

今般、このことについて技術的な目途がついたことから、平成29年度としていた使用済燃料の搬出期限を平成38年度とすることとし、平成30年2月28日に廃止措置計画変更認可申請書を原子力規制委員会に提出しました。

変更内容は、使用済燃料の搬出期間に関するものの他に使用済燃料搬出完了までの維持管

理と解体撤去として、①使用済燃料の貯蔵に必要な設備（燃料貯蔵プール水冷却浄化系等）については、使用済燃料の搬出が完了するまでその機能を維持管理すること。②使用済燃料の搬出の期間に並行して行う原子炉周辺設備や原子炉本体の解体撤去は、使用済燃料の貯蔵に必要な設備の機能に影響を与えない範囲で行うこと。また、③解体撤去物の保管場所の明確化として、現行の廃止措置計画書に記載している建屋内に保管する解体物の保管区域について、クリアランス測定・搬出までの保管等も踏まえ、保管場所とその容量を明確に記載しました。

現在、申請書の内容について、国の審査対応を行っております。

H29年4月～H30年3月の実績

時 期	内 容
平成 26 年 7 月 7 日～ 平成 29 年 5 月 31 日	<ul style="list-style-type: none"> ・カランドリアタンク等のトリチウム除去作業/系統空気置換【No. I】
平成 26 年 11 月 19 日～ 平成 29 年 5 月 31 日	<ul style="list-style-type: none"> ・劣化重水貯槽、重水貯槽等のトリチウム除去作業
平成 28 年 9 月 26 日～ 平成 29 年 3 月 31 日	<ul style="list-style-type: none"> ・主蒸気系及び隔離冷却系等の機器の解体撤去作業【No.VII】
平成 29 年 3 月 21 日～3 月 28 日	<ul style="list-style-type: none"> （レーザー切断機を用いたレーザー切断工法実証試験）
平成 29 年 4 月 3 日～平 成 30 年 3 月 23 日	<ul style="list-style-type: none"> ・A復水器及び湿分分離器等の解体撤去作業【No.VII】
平成 29 年 4 月 27 日	<ul style="list-style-type: none"> ・原子カプラントの先進技術国際会議（ICAPP2017）/京都【No. I】
5 月 14 日～5 月 19 日	<ul style="list-style-type: none"> ・OECD/NEA TAG62/デンマーク【No. II】
5 月 26 日	<ul style="list-style-type: none"> ・中部電力㈱との第 14 回廃止措置連絡会（ふげん）【No.VI】
5 月 31 日、6 月 1 日	<ul style="list-style-type: none"> ・第 41 回オープンセミナー/技術課題解決促進事業（公募型）紹介；
	<ul style="list-style-type: none"> ① 遮へい等機能を考慮した可搬型測定追加パーツの試作 ② 熱的切断時における配管把持切断ヘッド駆動治具の試作 ③ 全面マスク用追加遮光パーツの試作
7 月 2 日～7 月 7 日	<ul style="list-style-type: none"> ・第 25 回原子力工学国際会議（ICONE-25）/上海
7 月 10 日～7 月 14 日	<ul style="list-style-type: none"> ・IAEA 放射化原子炉内構造物の処理・貯蔵に関する専門家会合/オーストリア
7 月 18 日	<ul style="list-style-type: none"> ・第 2 回日台原子力専門家会合/東京
7 月 24 日・8 月 30 日	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 29 年度 原子力関連業務従事者研修基礎研修「廃止措置入門講座」への講師派遣/日本原電総合研修センター・関西電力美浜 PR センター
9 月 1 日～平成 30 年 1 月 31 日	<ul style="list-style-type: none"> ・第 30 回 施設定期検査
9 月 13 日～9 月 15 日	<ul style="list-style-type: none"> ・日本原子力学会 2017 秋の大会（北海道大学）
	<ul style="list-style-type: none"> ①原子炉施設におけるレーザー切断工法の実証 ②非破壊環境下での簡易的γ線測定方法の調査 ③「ふげん」炉心隔離に係る高線量率エリアでの配管切断方法の検討と実証 ④配管用電解除染装置の開発(2)除染試験結果について ⑤小口径配管廃棄物の内面除染方法の開発（その2）【No.IV】 ⑥「ふげん」廃止措置におけるプロジェクト管理データの評価 ⑦原子力施設廃止措置における知識マネジメント支援システムの構築 知識マネジメントシステムのこれまでの取り組み成果

9月19日～平成30年3月23日	・重水系・ヘリウム系等の汚染の除去作業（原子炉建屋及び原子炉補助建屋機器のトリチウム除去）
9月24日～9月30日	・ハルデン拡大会議/ノルウェー【No.Ⅲ】
10月9日～10月13日	・OECD/NEA TAG63/フランス【No.Ⅱ】
11月6日～11月9日	・CEA/JAEAの廃止措置/廃棄物処理に係る情報交換会議/フランス
11月6日～1月30日	・Aディーゼル発電機室換気系及び消音器の解体撤去作業
11月9日	・第35回 ふげん廃止措置技術専門委員会/東京事務所【No.V】
11月13日～11月17日	・台日原子力廃炉技術ワークショップ/台湾
11月28日、29日	・KAERIとの情報交換会議/東海
12月6日	・中部電力㈱との第15回廃止措置連絡会（中電浜岡原子力発電所）【No.VI】
12月11日	・平成29年度 原子力関連業務従事者研修(専門研修Ⅱ)「「廃止措置専門講座」
平成30年1月26日～2月19日～3月30日	・主蒸気系及び隔離冷却系設備等の解体撤去作業 ・原子炉側部からの炉内試料採取のための生体遮へい開口等環境整備作業
2月28日	・廃止措置計画変更認可申請書及び原子炉設置変更許可申請書の提出/原子力規制委員会【No.VIII】
3月15日	・平成29年度 廃止措置セミナー（エネ研主催）
3月26日～3月28日	・日本原子力学会2018春の年会（大阪大学吹田キャンパス） ① 「ふげん」廃止措置に関する知識等の現状分

今後の予定

時 期	内 容
5月14日～5月18日	・OECD/NEA TAG64/スペイン